

## 四国の大学連携による「四国学」科目の授業運用

### Class use of "Shikoku Study" subject by the university cooperation of Shikoku

岩城 暁大<sup>\*1</sup>, 林 敏浩<sup>\*2</sup>

Akihiro IWAKI<sup>\*1</sup>, Toshihiro HAYASHI<sup>\*2</sup>

<sup>\*1\*2</sup> 香川大学総合情報センター

<sup>\*1\*2</sup> Information Technology Center, Kagawa University

Email: akatsuki@cc.kagawa-u.ac.jp

あらまし：e-Knowledge コンソーシアム四国では、四国の8大学が連携し、「四国学」に関する科目をe-Learningで提供、単位互換を行っている。現在、香川大学で「四国学」として「四国の歴史と文化」「四国の自然環境と防災」「四国の地域振興」の3科目をe-Learning提供している。本稿では、eK4が行っている四国の大学連携による「四国学」科目の授業運用についての報告と、履修した学生からのアンケート集計結果・学生からの質問を分析し、今後の「四国学」の授業運用の改善を提案する。

キーワード：e-Learning, 四国学, 単位互換, 授業運用

#### 1. はじめに

近年、e-Learningにおける様々な取り組みが行われている。事業組織によって、e-Learningの配信方法、授業運用は様々であるが、PDCA等によるコースの評価・改善は必要とされ(1)、様々な事例を見ることができる。本稿では、四国の地域づくりを担う人材育成を目的とした組織であるe-Knowledgeコンソーシアム四国(以下eK4と略称する)のe-Learning配信科目「四国学」のメンター業務を通して得られた講義終了時のアンケート結果や講義配信中に学生から寄せられた質問から講義や授業運用の問題点を明らかにし、今後の改善を提案する。

#### 2. eK4と授業運用

##### 2.1 eK4の概要と四国学

eK4(2)は、四国の地域づくりを担う人材育成を目的に四国の8大学が連携した組織である。各大学の特徴ある講義をe-Learningとして提供し、『四国の知』を形成する。集積された『四国の知』を活用し、四国の魅力を発信するとともに、四国の郷土愛と地域に根差した人材を育成する。四国学は現在、『歴史・文化部門』、『社会部門』、『自然部門』の3科目が提供されており、『歴史・文化部門』では、四国にある遺跡や史跡・方言など、四国四県の歴史と文化についての講義、『社会部門』では、四国各県の地場産業や地域活性の取り組み・行政に関連する講義、『自然部門』では、四国四県の自然環境や防災に関する取り組みを取り上げた講義が開講されている。

##### 2.2 四国学の講義構成

四国学はe-Learningとなっているが、初回については対面でのガイダンスが行われている。2~15回はe-Learningで配信され、出席点と視聴確認を兼ねてLMS上で小テストが行われる。最後に学生の習熟度を測るため、定期試験が行われるが、これは対面での教場テストとなっている。

#### 2.3 授業運用について

授業配信はMoodle1.9で行い、授業運用に関しては、四国学3部門の担当教員と、メンターが行った。担当教員は、授業内容に関する質問への回答や、提出された課題の評価など、学習内容の指導を行い、科目配信に関しての総合的な判断を行っている。メンターは、各科目の配信準備から視聴履歴確認、成績管理、学生からの質問受付等の業務を行った。学生からの質問受付に関しては、システムの操作や進捗に関する質問はメンターから回答し、学習内容に関する質問については各担当教員へ回答依頼を行い、得られた回答を学生に返答した。

#### 3. 学生からの評価と改善点について

##### 3.1 学生アンケートからの改善

2012年度開講の四国学各3部門で全ての講義終了後アンケートを行った。アンケート内容は、「改善してほしい点」「今後の受講意向」等5問である。有効回答数は表1となっている。今後の改善という観点から、「改善してほしい点」を中心に結果を見ていく。

表1 アンケート回答数

	有効回答	受講者	回収率
歴史・文化部門	90	184	48.9
自然部門	86	146	58.9
社会部門	72	130	55.4

3科目に共通して、「音声」が聞き取りづらいとの意見が多くみられた。この改善については、受講環境の指導、例えばイヤホンを使う・ノートPCの場合は外付けスピーカーなどを使用する等を周知することが考えられる。また、根本的にコンテンツ収録時等の環境、収録機器の運用見直しも必要となる。

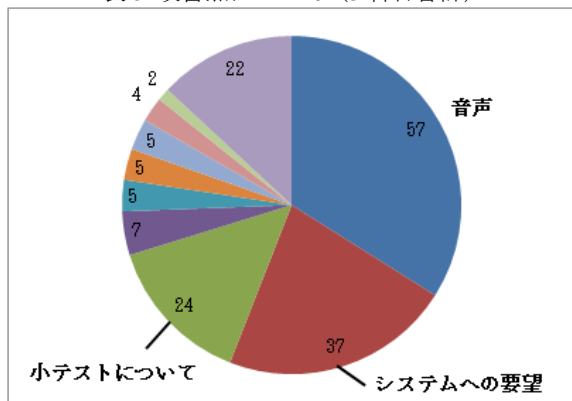
また、「システムへの要望」も多く寄せられていた。内容としては、小テストの不具合に関するものが多く、この問題は学生がこちらの想定以外の操作を行

っていたために不具合が起こっていた。ガイダンス等での LMS 操作の周知徹底、また、操作の不明な部分について、メンターへ質問だけではなく、自分で即時に調べられるよう FAQ を開設することで対応することができると考えられる。

表2 改善点について (複数回答)

改善してほしい点	歴史文化	自然	社会
音声	18	21	18
小テスト・講義の形式がバラバラ	1	14	9
システムの不具合	2	16	19
板書・資料がほしい		2	5
開講時間の厳守		2	3
ガイダンスの説明を詳細にしてほしい			5
動画が荒い	5		
論述解答の採点		1	3
意見交換・質問の敷居が高い			2
その他	9	10	3

表3 改善点について (3科目合計)



### 3.2 科目開講中の質問からみる改善点

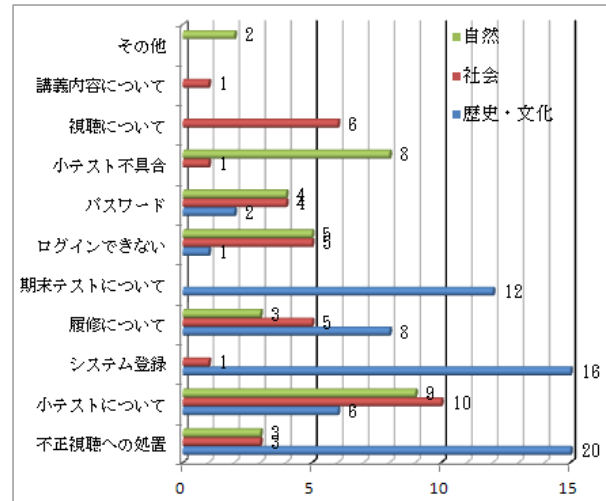
科目開講中に学生から寄せられた質問内容から、改善点を挙げ、対応について記述する。

質問件数は2012年度の歴史・文化部門では66件、自然部門は36件、社会部門35件となっている。質問内容の詳細は図4となっている。

「小テスト」については、前述の不具合の質問が多く挙げられており、LMSでの小テスト設定の再確認・見直しを行うことが必要である。また、不具合が発生してもその対応をあらかじめ決めておき、早期対応することで学生の不安を取り除けると考える。

「システム登録」はLMSの登録方法が分からないという質問であり、ガイダンスでの説明をより詳しくする方法や、FAQを開設することで、学生自身に解決させる手段が考えられる。

表4 各科目の質問内容



### 4. 考察

学生から最も意見・質問が多かったのは、大きく分けて、「コンテンツ」と「システム」に分けられる。「コンテンツ」については、コンテンツの制作状況に差があったことが、「音声が悪い講義がある」と不満が出た要因であると考えられる。また、「システム」については、学生がITリテラシーを持っているという前提で講義配信を行ったため、リテラシーを一定以上満たしていない学生からそれに関する改善や操作の方法などの質問が多く寄せられたと考えられる。

「コンテンツ」については既存の講義群については受講方法の周知、新規開発分に関しては音声の質に留意した収録が必要となり、「システム」に対しては、操作方法等の情報周知、さらにはe-Learningを受講する際のリテラシー教育を行うことも今後必要になってくると考えられる。

### 5. まとめ

学生アンケートと質問内容から改善点を見てきたが、「システム改善」の要望、「小テスト」の問題、「システムの使い方」については、学生へ各々の情報を周知徹底すること、各自で解決できる手段を講じておくことで学生側の不満は軽減すると考えられる。「音声」については、現在使用している講義では学生側でイヤホンを使う等の対応しかないが、コンテンツ新規開発の際には収録環境・機器の運用方法を見直す必要がある。また、H25年度後期の講義配信からはMoodle2.3への移行が予定されており、システム上の改善も行う予定である。

#### 参考文献

- (1) 鈴木克明: “教材設計マニュアル”, 北大路書房 (2002)
- (2) e-Knowledge コンソーシアム四国 HP, <http://www-ek4.cc.kagawa-u.ac.jp/>, (2013年6月16日アクセス確認)